

明智光秀劇場

百一場

「本能寺」への足取りを追う



鳥越
一朗

光秀ゆかりの地101を一挙紹介

私は思い立って、彼の人生劇の「場」を一つひとつ、可能な限り訪ねてみることにした。

現場に立ってこそ、見えてくるものが、必ずあるはずだからだ。(「はじめに」より)

はじめに

日本史上最大のミステリーといえば、何といっても本能寺の変だろう。最高権力者を殺害し、自らが取って代わるクーデターとして、これほど見事に成功した例は他にみられない。しかも殺されたのは、歴史上の人物として一番人気といってもいい、天下の織田信長だ。その首謀者・明智光秀は、しかし、十日余りのちに羽柴秀吉の攻撃を受け、あっけなく命を落としてしまう。だから、彼がその犯行に及んだ真意は残されることがなかった。

古今、本能寺の変の原因について、怨念説、野望説、突発説、黒幕説、複合説など様々な説が唱えられてきたが、未だに定説と呼べるものはないようだ。

光秀の人柄についても、逆臣の汚名のもと（あるいは判官贖身の立場から）、あることないこと書き立てられてきた感がある。今後ともほどの史料が出て来ない限り、こうした謎は明らかにならないであろう。

ただ、本能寺の変でのみ、取り上げられがちな光秀だが、前半生こそ謎に包まれているものの、信長と共に上洛してからの実績は、かなりの程度残されている。

人の人生は、誰であっても（波乱万丈であろうとなかろうと）ひとつの劇といえる。劇は「幕」と「場」からなる。すなわち、光秀の人生の「幕」と「場」は復元可能な部分が少なからずあるのだ。

私は思い立って、彼の人生劇の「場」を一つひとつ、可能な限り訪ねてみることにした。

現場に立つてこそ、見えてくるものが、必ずあるはずだからだ。

光秀の行動範囲は、秀吉や家康に比べればコンパクトだが、それでも今の都道府県で言えば、京都、滋賀、大阪、奈良、和歌山、福井、石川、岐阜、長野、群馬、静岡、愛知に及んでいる。しかも、その中身が濃い。

足利義昭・信長に従って上洛して以降、光秀は丹波平定をはじめ、金ヶ崎城の戦い、比叡山焼き打ち、槇島城の戦い、石山合戦、越前一向一揆攻め、上月城の戦い、有岡城の戦い、甲州征伐など、多くの歴史的な事件の場に立ち会っている。

また、「主役」である光秀の周りには、強烈な個性の脇役たちにも事欠かない。義昭、信長、秀吉、家康はもとより、朝倉義景、浅井長政、松永久秀、細川藤孝、荒木村重、佐久間信盛、柴田勝家、滝川一益、丹羽長秀、筒井順慶らがきら星のごとく、光秀の前に現れては様々な形で関わっていく。

そうした光秀の人生の「場」を地道に辿ることで、ひょっとしたら、ベールに包まれた光秀の人間性や、彼が生きた戦国という時代の息吹がほのかに立ち上ってくるのではないか。欲を言えば、本能寺の変の動機を自分なりに解釈し得るヒントがつかめるのではないかと、私は期待したのである。

本書のタイトルを「明智光秀劇場百一場」としたのは、そうした意味からであった。それでは、早速その幕を開けることにしよう。どうぞ、最後までお付き合いください。



目次

第二幕	上洛前	14
第一場	明智城 <small>（伝説の出生地）</small> <small>（岐阜県可児市）</small>	14
第二場	大桑城 <small>（美濃國の守護・土岐氏に仕える）</small> <small>（岐阜県山県市）</small>	18
第三場	妻木城 <small>（有力土豪の娘を娶る）</small> <small>（岐阜県土岐市）</small>	22
第四場	称念寺 <small>（越前で下積み修養する）</small> <small>（福井県坂井市）</small>	25
第五場	明智神社 <small>（朝倉義景に仕官が叶う）</small> <small>（福井県福井市）</small>	28
第六場	一乗谷朝倉館 <small>（朝倉氏の元で足利義昭に仕える）</small> <small>（福井県福井市）</small>	30
第七場	岐阜城 <small>（義昭と信長の間を取り持つ）</small> <small>（岐阜県岐阜市）</small>	34
第八場	立政寺 <small>（信長と共に義昭を迎える）</small> <small>（岐阜県岐阜市）</small>	37
第九場	桑実寺 <small>（上洛に際し、信長と義昭が落ち合う）</small> <small>（滋賀県近江八幡市）</small>	41
第十場	三井寺 <small>（園城寺）</small> <small>（信長・義昭一行が上洛途上に立ち寄る）</small> <small>（滋賀県大津市）</small>	44
第二幕	上洛後	47
第十一場	清水寺 <small>（義昭の上洛後最初の在所）</small> <small>（京都府京都市）</small>	47
第十二場	東寺 <small>（信長の上洛後最初の陣所）</small> <small>（京都府京都市）</small>	50
第十三場	旧本圀寺 <small>（三好三人衆の攻撃から義昭を守る）</small> <small>（京都府京都市）</small>	53
第十四場	旧二条城 <small>（信長が築いた義昭の御所）</small> <small>（京都府京都市）</small>	56
第十五場	飛鳥井邸 <small>（京の行政官として公家を集める）</small> <small>（京都府京都市）</small>	60
第十六場	金ヶ崎城 <small>（秀吉と共に織田軍の殿を務める）</small> <small>（福井県敦賀市）</small>	63
第十七場	田中城 <small>（金ヶ崎城攻めの途中に立ち寄る）</small> <small>（滋賀県高島市）</small>	66
第十八場	姉川古戦場 <small>（朝倉・浅井軍と織田・徳川軍が激突）</small> <small>（滋賀県長浜市）</small>	69
第十九場	野田城 <small>（三好三人衆・本願寺と戦う）</small> <small>（大阪府大阪市）</small>	72
第三幕	坂本城主	75
第二十場	將軍山城 <small>（朝倉・浅井勢の侵攻に備える）</small> <small>（京都市）</small>	75
第二十一場	吉田神社 <small>（陣中、服がてら入浴に訪れる）</small> <small>（京都府京都市）</small>	78



第二十二場 宇佐山城く荒れ城を任せられ、改修するく(滋賀県大津市)..... 81

第二十三場 延暦寺く信長の叡山焼き討ちに加担するく(滋賀県大津市)..... 83

第二十四場 高槻城く摂津国の争いを調停するく(大阪府高槻市)..... 86

第二十五場 坂本城く秀吉よりも早く「国」城の主となるく(滋賀県大津市)..... 89

第二十六場 木戸城く朝倉方・佐野氏の居城を攻めるく(滋賀県大津市)..... 92

第二十七場 交野城く河内の要衝で松永久秀と初対戦く(大阪府交野市)..... 94

第二十八場 竹生島く信長の浅井氏攻めを湖上からバックアップく(滋賀県長浜市)..... 96

第四幕 室町幕府滅亡 99

第二十九場 石山砦く義昭方の砦を落とすく(滋賀県大津市)..... 99

第三十場 今堅田城く囲い船で水城を攻めるく(滋賀県大津市)..... 102

第三十一場 下鴨神社く義昭への圧力、上京焼き討ちく(京都府京都市)..... 104

第三十二場 榎島城く義昭を京から追放するく(京都府宇治市)..... 107

第三十三場 静原城く義昭方の残党を討つく(京都府京都市)..... 109

第三十四場 北ノ庄城く越前で朝倉氏滅亡後の処理に当たるく(福井県福井市)..... 112

第三十五場 多聞山城く松永久秀の降伏後に入城するく(奈良県奈良市)..... 115

第五幕 越前遠征 118

第三十六場 岩村城く女城主・おつやの方の城を窺うく(岐阜県恵那市)..... 118

第三十七場 飯盛城く三好康長・頭如連合軍と対戦するく(大阪府四条畷市・大東市)..... 121

第三十八場 河内高屋城く三好康長・遊佐信教と対戦するく(大阪府羽曳野市)..... 124

第三十九場 龍門寺城く越前一向揆を攻めるく(福井県越前市)..... 127

第四十場 大聖寺城く加賀一向揆を攻めるく(石川県加賀市)..... 130

第六幕 丹波計略 133

第四十一場 宍人城く丹波の土豪・小畠氏の協力を得るく(京都府南丹市)..... 133

第四十二場 竹田城く「天空の城」の救援に向かうく(兵庫県朝来市)..... 136

第四十三場 黒井城く波多野秀治の裏切りに遭うく(兵庫県丹波市)..... 138



第七幕 石山合戦 141

第四十四場 石山本願寺く本願寺勢力の拠点を攻めるく(大阪府大阪市) 141

第四十五場 天王寺砦く本願寺軍の攻撃に苦戦するく(大阪府大阪市) 144

第四十六場 雑賀城くつわもの集団・雑賀衆を討つく(和歌山県和歌山市) 146

第四十七場 大和片岡城く再び松永久秀を攻めるく(奈良県上牧町) 149

第四十八場 信貴山城く久秀父子を自刃に追い込むく(奈良県平群町) 151

第八幕 亀山築城 155

第四十九場 亀山城く丹波に居城を築くく(京都府亀岡市) 155

第五十場 余部城く波多野派の福井氏を討つく(京都府亀岡市) 158

第五十一場 羽井城く青鬼?を攻略するく(兵庫県丹波篠山市) 160

第五十二場 園部城く「荒木鬼」を降参させるく(京都府南丹市) 162

第九幕 播磨・摂津攻め 165

第五十三場 上月城く尼子勝久・山中鹿介の救援に向かうく(兵庫県佐用町) 165

第五十四場 神吉城く毛利方の神吉頼定を討つく(兵庫県加古川市) 167

第五十五場 志方城く黒田官兵衛夫人の実家を攻めるく(兵庫県加古川市) 169

第五十六場 有岡城く謀反した荒木村重を囲むく(兵庫県伊丹市) 171

第五十七場 茨木城く中川清秀を帰順させるく(大阪府茨木市) 174

第五十八場 三田城く秀吉に協力して荒木平太夫を攻めるく(兵庫県三田市) 177

第十幕 丹波平定 179

第五十九場 氷上城(霧山城)く波多野宗長・宗貞父子を討つく(兵庫県丹波市) 179

第六十場 八上城く母親を犠牲に?波多野秀治を降伏させるく(兵庫県丹波篠山市) 181

第六十一場 八木城くキリシタン・内藤ジョアンの一族を攻めるく(京都府南丹市) 184

第六十二場 宇津城く宇津頼重を攻め、御料所山国荘を奪還するく(京都府京都市) 187

第六十三場 鬼ヶ城く鬼伝説の山で赤井氏を討つく(京都府福知山市) 189



第六十四場	峰山城く丹後に進んで波多野氏の残党を討つく(京都府京丹後市)	192
第六十五場	弓木城く名門二色氏を降ろすく(京都府与謝野町)	194
第六十六場	興禅寺く黒井城を落とし、斉藤利三を置くく(兵庫県丹波市)	197
第六十七場	金山城く波多野氏と赤井氏の連携を断つく(兵庫県丹波市)	200
第六十八場	福知山城く北部丹波の拠点築くく(京都府福知山市)	202
第六十九場	国領城く赤井氏最後の拠点落とすく(兵庫県丹波市)	204
第十一幕	馬揃え	207
第七十場	周山城く丹波東部の名城で月を愛でるく(京都府京都市)	207
第七十一場	山家城く破城令に背いた和久氏を懲罰するく(京都府綾部市)	209
第七十二場	興福寺く大和の領主から指図を徴すく(奈良県奈良市)	212
第七十三場	禁裏東門外く信長の「馬揃え」を取り仕切るく(京都府京都市)	215
第七十四場	大溝城く織田信澄の居城の縄張りをするく(滋賀県高島市)	218
第七十五場	天橋立く細川藤孝らの招きで遊覧するく(京都府宮津市)	220
第十二幕	甲州征伐	224
第七十六場	諏訪法華寺く不用意な発言で、信長に打ちのめされるく(長野県諏訪市)	224
第七十七場	躑躅ヶ崎館く武田氏の古府を検分するく(山梨県甲府市)	226
第七十八場	富士川く駿河国で富士見物を満喫するく(静岡県富士市)	229
第七十九場	掛川城く今川氏の興亡を偲ぶく(静岡県掛川市)	231
第八十場	浜松城く家康の本拠地でくつろぐく(静岡県浜松市)	234
第十三幕	本能寺の変	237
第八十一場	安土城く信長の賓客・家康を接遇するく(滋賀県近江八幡市)	237
第八十二場	愛宕山本宮く必勝祈願のくじを二度、三度引くく(京都府京都市)	240
第八十三場	愛宕山威徳院(西ノ坊)く百韻連歌会を催すく(京都府京都市)	243
第八十四場	水尾の里く明智越えて、清和天皇隠棲の地を通るく(京都府京都市)	246
第八十五場	篠村八幡宮く源氏ゆかりの神社に立ち寄るく(京都府亀岡市)	248
第八十六場	老ノ坂く深夜に京への峠を越えるく(京都府亀岡市)	251



第八十七場	沓掛く西国との分岐点で真夜中の食事をとるく(京都府京都市)	255
第八十八場	桂川く火繩に火を付け、渡渉開始するく(京都市西京区桂く右京区西京極)	257
第八十九場	日本能寺く早朝、ついに信長を討つく(京都府京都市)	259
第九十場	二条御所く信長の嫡男・信忠も討つく(京都府京都市)	262
第十四幕	山崎の合戦	266
第九十一場	瀬田橋く焼き落とされて、安土入城を阻まれるく(滋賀県大津市)	266
第九十二場	洞ヶ峠く筒井順慶の到着を待ちわびるく(京都府八幡市)	269
第九十三場	淀古城く秀吉との決戦に備えるく(京都府京都市)	271
第九十四場	山崎合戦古戦場く秀吉の大軍を迎え撃つく(京都府大山崎町)	274
第九十五場	勝竜寺城く大敗して籠城、そして暮夜脱出く(京都府長岡京市)	278
第九十六場	小栗栖く近江を目指すも、土民に討たれるく(京都府京都市)	280
第十五幕	慰霊	283
第九十七場	首塚く非業の死を憐れんで供養されるく(京都府京都市)	283
第九十八場	胴塚く首とは別に葬られるく(京都府京都市)	286
第九十九場	西教寺く供養塔と墓のある近江の古刹く(大津市)	288
第一百場	明智風呂く菩提を弔うため、光秀の叔父?が建立く(京都府京都市)	291
第一百一場	御霊神社く善政を偲んで祀られるく(京都府福知山市)	293
はじめに		2
関連年表		296
関連城郭位置図		302
番外アルバム		306
主な参考文献		312
あとがきに代えて		314
著者プロフィール・奥付		317

第一場 明智城く伝説の出生地く（岐阜県可児市）

人生劇の第一場と言えば、まずは誕生のシーンであろう。では、明智光秀はどこで生まれたのか。永祿十一年（一五六八）に上洛するまでの光秀の前半生は、分からないことだらけなのだが、彼が美濃国（岐阜県南部）の出身であることは、どうも確からしい。

禁裏御蔵職の立入宗継が書いた記録集『立入左京亮入道隆佐記』に、光秀について「美濃国の住人とき（土岐）の随分衆也」とあるからだ。しかし、属した氏族や具体的な生誕地、生年月日、父母の名前等は実のところはつきりしない（江戸時代につくられた光秀の系図が複数あるが、いずれも信頼に足るものではないようだ）。ただ、光秀の出生に纏わる伝承はいくつか残されている。

『明智軍記』によると、光秀の出自は土岐氏の庶流・明智頼兼の後裔であり、明智氏は代々東美濃の明智城を根拠にしていたが、弘治二年（一五五八）九月、美濃の斉藤竜興に攻められ、光秀の叔父である明智城主・明智光安は戦死し、明智氏は亡んだ。しかし、この時城内にいた光秀は、光安の子・光春らとお家再興のため越前に逃れたとされる。

また、同書では、光秀の享年を五十五としており（辞世の句に「五十五年の夢」とある）、没年



明智城（長山城）本丸跡

から逆算すると、光秀は享祿元年（一五二八）の生まれとなる（もっとも『当代記』という史書では、光秀は数え六十七歳で死去したとしている）。

『明智軍記』は江戸時代に書かれた軍記物なので、全てを信用することはできないのだが（実際、明智城を攻めたとする斉藤竜興はこの時まで八歳だから、父の義龍との混同だろう）、現在、明智城址とされる場所が岐阜県内に二カ所存在する。

一つは可児市瀬田長山にある明智城（長山城）址だ。江戸期に書かれた地誌『美濃国諸旧記』には、康永元年（一二四二）、明智次郎頼兼が美濃国可児郡明智庄長山に明智城（長山城）を築いたとあり、文明から弘治の頃までの三代の城主として、明智駿河守光繼、



同子遠江守光綱、其子十兵衛光秀の名を記して
いる。

『可児町史』では、『美濃国諸旧記』を元に光秀は
この地で生まれたとし、光秀の母親として、小浜の
武田義統の妹と、揖斐の山岸貞秀の女の両説がある
と紹介している。

城址は、名鉄広見線明智駅から南へ約一・七キロ。標高百七十五メートル、比高（麓から山頂まで
の高さ）八十メートルの丘陵地の上にあり、一帯は明智城址公園として整備され、曲輪や馬場、見張
り台、大手門の跡など多くの遺構が残る。

二の丸跡には、「七ツ塚」という真新しい石碑が立ち、弘治二年に斉藤氏に攻められた時、討ち死
にした明智軍の七武将を葬ったものとしているが、『明智軍記』にある明智城はここだ、と強くアピ
ルしているように見える。また、丘陵北麓の天竜寺（可児市瀬田一二四二）には、明智一族の墓のほ
か、高さ百八十四センチの光秀の巨大な位牌まである（ちなみに、これは位牌として日本一の大き
さらしい）。

さて、もう一つの明智城址は、恵那市明智町城山にあり、最寄り駅は同じ明智駅でも、明知鉄道の
明智駅だ。標高五三〇メートル（比高八十メートル）の丘陵地に、曲輪や土塁、豎堀の跡などが残さ
れ、北麓にある龍護寺には、「明智光秀公出生地」という碑と供養塔が立てられている。

この地では、光秀は明智城主・光隆（光綱）の子として、千畳敷と呼ばれる岩で生まれたとする。母は、

姑に嫌われて離縁され、光秀を連れて若狭の小浜に移ったが、
光秀は元服後、この地に戻り、学問と武術の修行に励んだと
いう。

明智町には、他にも光秀の産湯井、学問所、母・お牧の方
の墓などが残されているが、こちらの明智城（明知城／白鷹
城）は、宝治元年（一二四七）に遠山氏の始祖・遠山景重が
築いたとされ、その後も長く遠山氏の拠点であったから、光
秀の生誕地とするには無理が多いようだ。ちなみに、後年光
秀は信長と共に、武田氏に攻められたこの城の救援に向かっ
ている（一一八頁参照）。

ほかに、岐阜市の北に接する山県市の中洞にも伝承が残る。
ここでは、光秀は美濃国美山町中洞で、土岐美濃守の従臣・
土岐四郎基頼と、同地の豪族中桐源左衛門の長女・お佐多と
の間に、大永六年（一二二六）八月十五日に生まれたとする。

十一歳の時に美濃国可児郡の明智（長山）城主・明智光綱の
養子になるが、弘治二年（一五五六）九月、明智城の落城により諸国への修行の旅に出たという。

面白いのは、山崎の合戦で死んだのは光秀の影武者で、本物の光秀は、その後荒深小五郎と名乗っ
て中洞に住み、七十五歳の時、関ヶ原合戦に東軍側として参加するため出陣するが、その途上、増水



光秀の墓とされる桔梗塚（中洞白山神社）



明智城光秀出生地碑（龍護寺）
〈写真提供：攻城団〉



古城山山頂にある大桑城ミニチュア模擬天守 〈写真提供:攻城団〉

第二場 大桑城く美濃国の守護・土岐氏に仕えるく(岐阜県山県市)

光秀は「とき(土岐)の随分衆也」という古文書の記録があることから、彼が土岐氏に仕えていた

した川に落ちて死んだとされているところだ。光秀生き残り伝説の一つである。当地の中洞白山神社には、光秀の墓碑と墓石があり、明智氏の家紋の桔梗ききょうにちなんで「桔梗塚」と呼ばれている。以上、いずれももっともらしい話が伝わっているが、しかし、光秀が名族・明智氏に属し、明智城で生まれたという事実は、確かな史料では確認されていない。本能寺の変の首謀者は、その人生の第一場を濃いベールで隠したままなのである。

- 明智城(長山城) 明智城址公園 岐阜県可児市瀬田長山 名鉄広見線明智駅から南へ徒歩二十五分
- 明智城(明知城/白鷹城) 岐阜県恵那市明智町城山 明知鉄道明和線明智駅から東へ徒歩二十分
- 中洞白山神社 岐阜県山県市中洞 JR東海道線岐阜駅から車で四十分

こともどうやら確からしい。では、土岐氏とはどういう氏族であったのか。土岐氏は、清和源氏系美濃源氏の嫡流ちやくりゅうで、南北朝時代から美濃国の守護を務める名門であった。

最盛期の十四世紀半ばには、美濃に尾張、伊勢を加えた三国の守護大名になった。しかし、光秀が生まれる前後の永正十四年(一五一七)、土岐頼武よりのり・頼芸よりのりの兄弟間で跡目争いが起こる。土岐氏の家臣だった齋藤氏がそれに絡んで台頭し、頼芸を守護へと導くが、やがて両者は対立、天文十一年(一五四二)、齋藤氏の当主・齋藤道三どうざんは、頼芸の居城・大桑城おほを攻めて、頼芸を尾張へ追放した。

道三と言えば、下剋上を繰り返し



て出世し、「美濃のママシ」と恐れられた戦国の梟雄である。頼芸は尾張の織田信秀（信長の父）と越前の朝倉孝景の支援を受け、対立していた頼武の子・頼純とも連携して、何とか美濃国への復帰を果たした。

天文十六年（一五四七）、信秀は道三の居城・稲葉山城を攻撃するが、最終的に兩人は和睦し、翌年、道三の娘・帰蝶（濃姫）が信秀の嫡男・信長に嫁いだとされる。その結果、後ろ盾を失った頼芸は、天文二十一年（一五五二）、道三によって美濃国から追放され、土岐氏は滅亡した。この時、大桑城は道三の軍勢に焼き払われ、廃城となったようだ。

ところで、道三はほどなく息子の義龍に家督を譲るが、父子の関係はしだいに不和となり、弘治二年（一五五六）四月、長良川の戦いで両者はぶつかり、道三は戦死する。『明智軍記』の記述からすれば、明智城が斉藤義龍の子・竜興に攻められて落城し、光秀が越前に逃亡するのは、その五カ月後ということになる。

前述したように、竜興はこの時まで子どもで、どうにもおかしな話なのだが、仮に竜興が義龍の誤りだとしたら、当時の美濃国の不安定な情勢からして、それはあり得たことかもしれない。

さて、大桑城は十三世紀の半ば、承久の乱の功績により大桑郷を与えられた逸見義重の子・大桑又三郎が築いたとされ、のちに、同城は守護となった土岐氏の管轄下に置かれた。土岐氏は当初、本拠を一日市場館（美濃国土岐郡）に置いたが、その後長森城、川手城、福光館、枝広館へと順次遷し、天文四年（一五三五）、枝広館が長良川の洪水で流されると、当主・頼芸は道三の勧めで、大桑城を居城としたのであった。

その大桑城を、若き日の光秀は、同氏の家臣として訪れることがあったのではないか。あるいは、土岐氏滅亡に至る一連の事件によって、彼はその後の人生に大きな影響を受けたのかもしれない。

光秀が本能寺の変の直前に催した愛宕百韻で、彼が詠んだ句「時は今あめが下しる五月哉」の「時」は「土岐」を意味し、土岐氏の再興を誓ったものと解釈もされるが、光秀の土岐氏に対する帰属意識はどれほどのものだったのだろうか。

ちなみに、美濃国を追われた頼芸は、その後近江国、常陸国、上総国を経て、最後は甲斐の武田氏の預かりとなり、天正十年（一五八二）の、信長が武田氏を攻めた甲州征伐の際、織田軍によって発見され、美濃三人衆の一人、稲葉一鉄の計らいで美濃国へ帰還し、半年後に死んだという。

甲州征伐に参加した光秀が、ひよっとして、土岐氏のラストエンペラーに「再会」していたとしたらどうであろうか。光秀は頼芸から何かを託され、それが半年後の本能寺の変に繋がった、と考えるのも歴史推理としては面白い。

大桑城址は標高四百八メートル（比高三百四十五メートル）の古城山の山頂にある。光秀出生の伝承がある中洞地区から、武儀川をはさんで西に二キロほどの位置だ。現在はミニチュア模擬天守が復元され、曲輪、石積み、土塁、堀切、豎堀、井戸などの遺構が見られる。

■大桑城址 岐阜県山県市大桑洞古城山

JR東海道線岐阜駅から岐阜バス岐阜高富線で「山県市役所」下車、ハイバス大桑線に乗り換え「幸報苑」下車、徒歩七十分

第三場 妻木城く有力土豪の娘を娶るく（岐阜県土岐市）

成長した光秀は、美濃国の妻木氏から正室を娶ったとされる。それはたぶん、光秀がまだ美濃国にいた頃のことだろう。妻木氏は明智氏と同様、土岐氏の庶流であり、光秀の妻・熙子ひろこは、十二代目当主・妻木広忠つまきひろただの娘だったとされる（広忠の弟・範熙のりひろの娘とも）。

ところで、光秀に関して、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、自著『日本史』の中で「もとより高貴の出ではなく」と紹介しており、丹波国ともい羽井氏ひいが著した『羽井家日記』には「明智十兵衛という族姓も知らぬもの」という記述がある。

また、光秀本人も、天正九年（一五八一）に定めた『家中軍法』の末尾に「石ころのような存在から召し出され」と信長への感謝の気持ちとともに、自らの出自をほめかしている。

しかし、熙子の父・広忠は、三河・尾張・美濃三国の国境付近にある妻木城の城主だった。同城は、標高四百七メートル（比高百九十メートル）の城山の山頂にあり、十四世紀の半ばに土岐頼重よしのりが築城したといわれる。

後年、明智氏が入ったのち、妻木氏の居城となったようだが、その妻木氏と縁組を持ったということは、光秀の出所もそれなりの身分だったのではなからうか。前に紹介した「とき（土岐）の随分衆（身の高い人）也」という記録が、ここで信憑性を帯びてくるのである。仮に光秀が、フロイスや羽井氏の言うような低い身分の出であったなら、努力を重ねてお嬢様をゲットできるほどの、能力と将来性をすでに身に付けていたということだろう。

さて、光秀の女性観として、こんな有名な逸話がある。光秀と熙子の婚礼が間近となった頃、熙子が疱瘡（天然痘）にかかり、美貌の顔があばたになってしまふ。妻木氏は申し訳なく思って、代わりに熙子と瓜二つの妹を嫁がせようとしたが、光秀はそれを見破り、「容貌は歳月や病気でどうにでも変わるもの。ただ変わらぬものは心の美しさである」として、妹を送り返し、約束通り熙子を妻に迎えた。そして、生涯側室を置かず、熙子だけを伴侶とした、というものである。

もっとも、熙子のあばたは大したものではなかったのか、光秀と結婚後、その美貌を聞きつけた信長が、彼女を出仕させ、長廊下で待ち伏せ



妻木城址の石垣跡（写真提供：攻城団）



して後ろから抱きついたという話もある。熙子は信長と知らずに扇でしたたかに打ち、事なきを得たようだが。

ともあれ、そんなフェミニストな光秀であったなら、婚約時代からたびたびこの城に足を運んだのかもしれない（ちなみに、可児市の明智城から土岐市の妻木城までは、南西に二十キロ近い距離がある）。広忠も光秀に信頼を寄せ、光秀が信長の元で出世してのちは、彼の家臣となった。天正十年（一五八二）六月十三日に山崎の合戦で光秀が敗れると、広忠は同月十八日に近江の西教寺で一族の墓をつくったあと、墓の前で自刃したという。

妻木城は、その後広忠の跡を継いだ彼の孫・頼忠が守り続け、江戸時代に入って、城山の北麓に妻木城土屋敷を築き移り住んだが、十七世紀半ばに妻木氏の断絶により、城郭ともども放棄された。

現在、山上の城址には、石垣、曲輪、土塁などの遺構が整備され、麓の屋敷址にも石垣、井戸跡、庭園跡、門跡などが見られる。また、妻木城址から一キロほど北にある崇禅寺は、十四世紀半ばに創建された妻木氏の菩提寺で、同寺の山門は、妻木城土屋敷から移築されたものとされる。

■妻木城址 岐阜県土岐市妻木町
東海環状自動車道土岐南多治見ICから南へ車で十五分

第四場 称念寺へ越前で下積み修養する（福井県坂井市）

『明智軍記』によると、光秀は明智城を脱出したあと、越前に入り縁故のあった称念寺の僧に妻子を預け、諸国遍歴に出生して、永禄五年（一五六二）に帰国したとある。しかし、諸国遍歴では、名だたる武家の軍事・政治を視察したことになるが、歴史的に見て首をかしげるような記述が多く（死んでいるはずの今川義元が出てきたりする）、フィクションである可能性が大きい。

ただ、光秀が越前にいたことは確かであろうで、次のような伝承も残されている。明智城の落城により同城を脱出した光秀は、身重の熙子を背負い、美濃国郡上郡から油坂峠（現・国道百五十八号線）を越えて越前へ入り、朝倉氏に仕官を求めた。

しかし、すぐには叶わず、仕官するまでの間、称念寺の園阿上人の好意で、同寺の門前に仮住まいしたというものだ（園阿上人は、光秀の叔父・光安と昵懇であり、明智城が落城する時、光安が光秀に園阿上人を頼るよう伝えたとされる）。

油坂峠（文字通り脂汗を流すほどの難所であった）を越えると、穴馬（福井県大野市）を経て、朝倉館のある一乗谷に出るが、称念寺はそこからさらに二十キロほど北上しなければならぬ。明智城からだて優に二百キロ近くはあり、それを光秀は、家族を伴って踏破したことになる。

やっと確保した仮住まいだが、称念寺の辺りは、日本有数の豪雪地帯であり、そこでの冬の暮らしは、さぞ厳しいものであったろう。

光秀と称念寺の関係は、『遊行三十一祖 京畿御修行記』という文書で裏付けられている。天正七



崇禅寺山門（写真提供：攻城団）



称念寺境内にある芭蕉の句碑 〈写真提供:ニッポン城めぐり〉

年（一五七九）から八年にかけて、相模国藤沢にある遊行寺の同念上人が、京都・奈良を遊行した際、称念寺の僧を坂本城の光秀の元に派遣し、奈良で修業したいので、光秀配下の大和筒井城主・筒井順慶への紹介状をいただきたいと要請した。

光秀は、朝倉義景を頼って、称念寺門前に十カ年居住していたので、大変懐かしがり、使いの称念寺の僧をしばらく坂本に引き留めた。そして、同念上人は光秀から順慶への口添えにより、奈良での修行が無事果たせた、というのである。

称念寺門前で暮らした下積み時代を、今や出世して坂本城主となっていた光秀は、しみじみと思いきこし、同寺の僧に対して、下にも置かぬもてなしをしたのだろう。称念寺には、光秀の妻・熙子にまつわる逸話も残されている。当時は貧しかった光秀だが、すでに文化的教養があり、連歌会を催すこともたびたびであった。ある連歌会の際、熙子は夫に恥をかかせないために、女の命である黒髪を売って金をつくり、客人の酒肴を用意した。

光秀は、そんな熙子に感謝し、「そなたを五十日のうちに輿にも乗るような身分にしよう」と言っ、遠からずその思いをかなえ、終生妻へのいたわりを欠かさなかったという。

俳人・松尾芭蕉は、「奥の細道」を旅する途上、越前丸岡でこの話を聞き、伊勢の門人・山田又玄宅に立ち寄った時、世話になった妻女に次のような句を贈っている。

「月さびよ 明智が妻の 咄せむ」

才能がありながら不遇の又玄を健気に支え、心を込めて旅中の自分をもてなしてくれた又玄の妻に、芭蕉はふと熙子の姿を重ねたものらしい。本能寺の変で逆臣の汚名を着せられた光秀であったが、丸岡の地では、百年余りたった芭蕉の時代においても、光秀夫妻の美談が語り継がれていたのだ。

称念寺は養老五年（七二二）、白山を開いた修験道の僧・泰澄によって創建され、鎌倉時代になって時宗に改められた。建武の新政の立役者の一人、新田義貞は、もう一人の立役者、足利尊氏と対立し、越前藤島で戦死するが、その遺骸はこの寺に運ばれたといわれ、境内には義貞の墓がある。

教養ある光秀のことだから、義貞の波乱に満ちた生涯について、当然承知していただろう。光秀が白山信仰に心酔したとはとても思えないが、下積み生活という身であれば、毎朝白山に向かって何事か願をかけ、当時は朝敵とされていた義貞の墓前に手を合わせるぐらいのことはしていたかもしれない。

■称念寺 福井県坂井市丸岡町長崎一九・一七

JR北陸本線丸岡駅から本丸岡行き京福バスで「舟寄」下車、徒歩十分

著者プロフィール

鳥越一朗 (とりごえ・いちろう)

作家。京都府京都市生まれ。

京都府立嵯峨野高等学校を経て京都大学農学部卒業。

主に京都や歴史を題材にした小説、エッセイ、紀行などを手掛ける。「1964 東京オリンピックを盛り上げた 101 人」、「おもしろ文明開化百一話」、「天下取りに絡んだ戦国の女」、「恋する幸村」、「杉家の女たち」、「ハンサムウーマン新島八重と明治の京都」、「電車告知人」、「京都大正ロマン館」、「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」、「平安京のメリークリスマス」など著書多数。

明智光秀劇場百一場

～「本能寺」への足取りを追う～

定 価	カバーに表示してあります
発行日	2020 年 1 月 1 日
著 者	鳥越一朗
デザイン	岩崎宏
編集・制作補助	ユニプラン編集部 鈴木正貴 橋本豪
発行人	橋本良郎
発行所	株式会社ユニプラン 〒 601-8213 京都府京都市南区久世中久世町 1 丁目 76 TEL075-934-0003 FAX075-934-9990
振替口座	01030-3-23387
印刷所	株式会社ティ・プラス
ISBN978-4-89704-490-3 C0021	



早春に薄黄色の花を咲かせるヒユウガミズキ。京都府の丹後・丹波地方に自生することから、明智光秀(日向守)にちなんで命名されたともいわれる。